

19世紀から20世紀初め、ヨーロッパ大陸とは異なる文化的な独自性を追求した北欧諸国の芸術家たちは、雄大な山岳やフィヨルドといった独特の自然を描いた風景画を盛んに制作しました。また、神々が知恵比べや戦いを繰り広げる北欧神話や、森に棲む怪物や動物が登場する民間伝承を主題とする作品も数多く現れます。このような北欧の自然や物語は、ファンタジー映画やアニメ、RPGゲームの着想源として取り上げられてきました。

物語の主人公が  
魔力の宿る森に  
足を踏み入れるように、  
超高層ビルの立ち並ぶ  
新宿に現れた  
ファンタジー  
神秘の別世界に  
触れてみてください。



フーゴ・シンベリ  
《素晴らしい花》  
スウェーデン国立美術館  
Photo: Cecilia Heisser / Nationalmuseum

展覧会 北欧の神秘 —ノルウェー・スウェーデン・フィンランドの絵画 会期：2024年3月23日(土)ー6月9日(日)

表紙作品：  
ロベルト・ヴィルヘルム・エークマン  
《イルマタル》  
1860年  
フィンランド国立アテネウム美術館  
Photo: Finlands Nationalgalleri / Hannu Aaltonen

フィンランドの民族叙事詩『カレワラ』の物語は天地創造から始まる。大気の女神イルマタルは上空から海へと降りると、その膝に金目の鴨が巣を作り、卵を産み落とす。その卵から大地、空、太陽、月、星が誕生したのである。また、イルマタルは海上で波風と交わり、『カレワラ』の中心人物のひとり、吟遊詩人であり老賢者のヴァイナモイネンをもうけた。

 SOMPO美術館  
Sompo Museum of Art

〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1 <https://www.sompo-museum.org/>  
執筆：武笠由以子、古舘遼(SOMPO美術館) 編集：中村祐美子(SOMPO美術館)  
デザイン：坂本佳子(大向デザイン事務所)  
発行：公益財団法人 SOMPO美術財団 / SOMPO美術館 発行日：2024年3月23日  
© 公益財団法人 SOMPO美術財団 / SOMPO美術館

鑑賞ガイド

☆☆☆

語り継がれた物語



北欧  
の  
神秘

ノルウェー・スウェーデン・フィンランドの絵画

THE MAGIC NORTH  
ART FROM NORWAY, SWEDEN AND FINLAND

# 本展の注目作家

## ノルウェー

ガーラル・ムンテ  
Gerhard Munthe  
1849-1929

初期には写実的な作風で自国の風景を多く描いたが、その後、ノルウェーの伝統工芸を参照したテキスタイルや陶芸、家具などのデザインに関心を寄せた。装飾芸術の分野で名を成し、神話や民話に取材した絵画や挿絵でも知られている。

テオドル・キッテルセン  
Theodor Kittelsen  
1857-1914

母国の自然に魅了され、ロマン主義的な風景画を描いたほか、本の装丁や挿絵も手がけ、森の中の動物やトロール、妖怪の登場する民話の世界を独創的に表現した。ノルウェーの民話にしばしば登場するトロールや妖怪の視覚的なイメージを形成するのに貢献した重要な画家。

## スウェーデン

アウグスト・ストリンダバリ  
August Strindberg  
1849-1912

19世紀末の北欧における最も重要な作家のひとり。正式な美術教育を受けておらず、主に執筆活動が停滞した時期に絵を描いていた。文学作品では、当時の社会と人間模様を詳細に描写したが、絵画では粗い筆致を用いた表現主義的な作風の風景画を多く描いた。

エウシェン王子  
Prince Eugen  
1865-1947

国王オスカル2世の末子として生まれ、早くから芸術的才能を発揮。パリ留学中に外光派に触れ、スウェーデンのロマン主義を代表する風景画家となった。同時代の芸術家たちを支援する一環として作品を蒐集し、スウェーデン美術の大規模なコレクションを形成した。

## フィンランド

アクセリ・ガッレン=カッレラ  
Akseli Gallen-Kallela  
1865-1931

フィンランドの民族叙事詩『カレワラ』を主題とする芸術を探究した国民的画家。象徴主義やゴッダンの総合主義、日本美術などから影響を受け、装飾的な画風を特徴とする。スウェーデン語系の裕福な家庭に生まれたが、帝政ロシアの圧政に反発し、民族主義の色濃い作品によって母国の独立運動の展開に寄与した。

フーゴ・シンベリ  
Hugo Simberg  
1873-1917

ガッレン=カッレラに師事し、象徴主義を色濃く反映した絵画を描いた。作品には死神や悪魔がしばしば登場し、独特のユーモラスでありつつ陰鬱な世界観を示している。油彩やテンペラ、版画を制作したほか、タンペレ大聖堂の内部装飾を担当し、大規模なフレスコ画を描いた。

さらに北欧を知るために

おすすめの書籍

5選

1 北欧文化協会、バルト・スカンディナヴィア研究会、北欧建築・デザイン協会(編)  
『北欧文化事典』丸善出版、2017年  
北欧の歴史、社会、文化などをあまねく紹介する、約700ページの大著。  
北欧の神話や民話を詳しく知りたい方にもおすすめ。

2 マーシャ・ブラウン(絵)、せたていじ(訳)  
『三びきのやぎのがらがらどん』福音館書店、1965年(初版)  
ノルウェーの昔話が題材。3匹のヤギが山の橋を渡ろうとすると、その下でトロールがヤギたちを狙っていた。無事に橋を渡るため、ヤギたちはトロールと命がけの駆け引きをする。

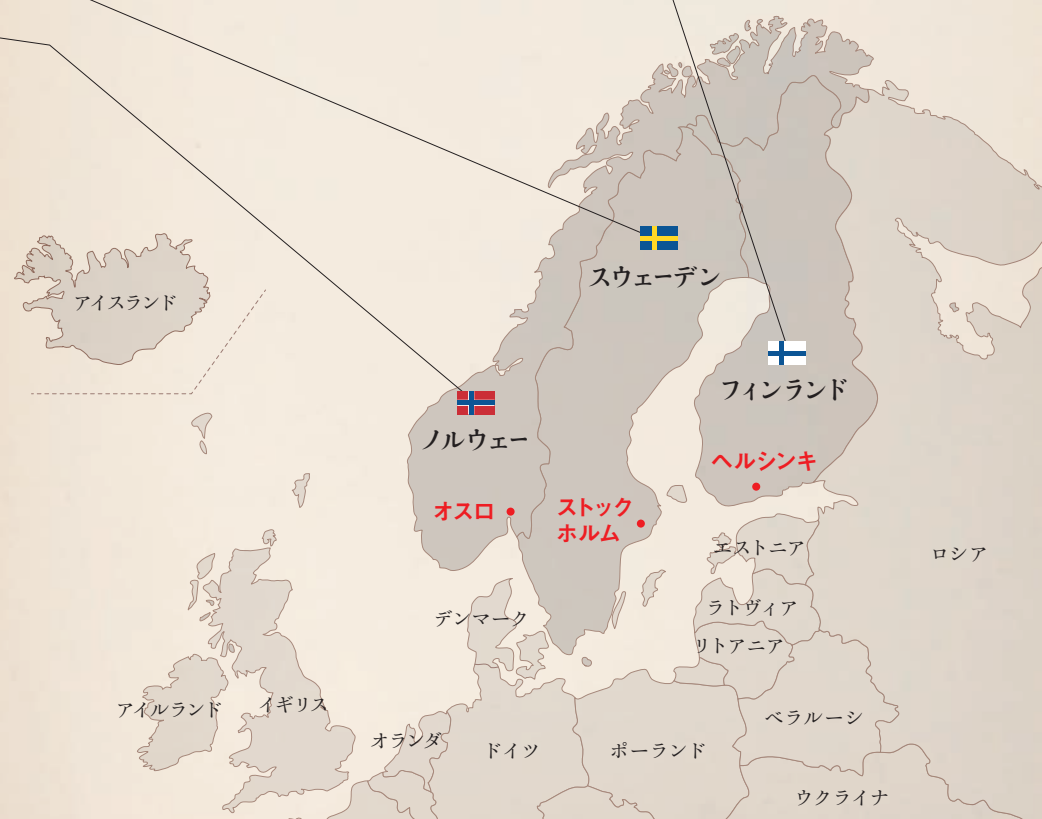


3 エドヴァルド・ムンク(著)、ムンク美術館(原案・テキスト)、原田マハ(訳)  
『愛のぬげがら』幻冬舎、2022年  
ムンクが手紙やスケッチブックに書き残したテキストを集めた本。作家原田マハによる分かりやすい翻訳と、作品図版や写真でムンクの世界に浸ることができる。



4 ひがしやまかい  
東山魁夷  
『風景との対話』新潮社、1967年(初版)  
日本画家・東山魁夷が国内外各地をめぐる書いた旅行記。  
その中の北欧紀行については、絶版ながら『白夜の旅』(新潮社、1963年)に詳しくつづられている。

5 『LifTe 北欧の暮らし』and graphic design  
2018年創刊。デザイン、食、アートなど、北欧の文化について、現地取材とインタビューを中心に豊富なカラー写真で紹介。既刊4号(2024年2月現在)。



北欧の物語にはトロルという怪物がよく登場します。「北欧の神秘」展には、トロルを退治する物語を描いた連作が2件出品されます。ここでそれらをご紹介します。

## トロルをめぐる物語\_1

### ソリア・モリア城

黄金に輝くソリア・モリア城を探す旅に出たアスケラッドは、野山を越え、森に深く分け入り、オオカミなどの動物たちに次々と出会う。門番のドラゴンを警戒し、黄金の鳥に目を奪われながらも、ついに城へたどり着く。城内でトロルを倒し、姫を救出したアスケラッドは、国の領土の半分と、ソリア・モリア城の宝を全て与えられ、姫との盛大な婚礼をとりおこなった。



テオドール・キッテルセン《アスケラッドとオオカミ》1900年 ノルウェー国立美術館

辺りはどんどん暗くなっていく。一對の緑色をした眼が茂みの中からアスケラッドの方を向いて光っている。オオカミだ。「ウーウウ」と、オオカミはうなった。「何か食べ物はないか! 腹でこで、胃が痛くてたまらない!」「そうしたら、私のナップサックに残っているパンのかけらでも何でも分け合おうじゃないか。他にできることが見当たらない」と、アスケラッドは答えた。「ウーウウ、それなら、私はお前を食べるまい」と、オオカミは言った。



テオドール・キッテルセン《トロルのシラミ取りをする姫》1900年 ノルウェー国立美術館

門は大きく開け放たれていた。中ではお姫さまが、眠っている巨大なトロルのもとに座って、トロルの体のシラミを取っている。「あらやだ! こんなところにキリスト教徒が来てしまうなんて!」と姫は言った。「そのようだね」とアスケラッドは答えた。お姫さまが言うことには、「トロルが目覚めたら、あなたを生きのまま食べてしまうわ。でも、あそこの瓶の中のもの飲めば、隅っこにある大剣を振るうこともできる。急いで!」



テオドール・キッテルセン《アスケラッドと黄金の鳥》1900年 ノルウェー国立美術館

城のそばには、金で覆われた菩提樹が立っていた。その樹には、太陽のように光り輝く黄金の鳥がとまって眠っていた。何十万年もの間、眠り続けている。鳥は、アスケラッドが触れてみたくなるほどに魅力的であった。しかしそのとき、アスケラッドは巨大な醜いドラゴンのことを思い出す。黄金の鳥の鳴き声が、ドラゴンを目覚めさせてしまうかもしれない。アスケラッドは城の門の方へ静かに進んでいった。

## トロルをめぐる物語\_2

### 名誉を得し者オースムン

アイルランドの王の命により、トロルの巣に囚われた姫を助け出すため、オースムンは兄弟二人とともに船で向かう。ひとりで山の城へ乗り込み、トロルを倒して姫を救出したオースムンだが、船に残った兄弟の姿はすでになかった。取り残されたオースムンは、城内で馬を見つけると、城内の財宝を手にして、姫と共に馬に乗って、海を越え帰還した。



ガーラル・ムンテ《山の門の前に立つオースムン》1902-1904年 ノルウェー国立美術館



ガーラル・ムンテ《帰還するオースムンと姫》1902-1904年 ノルウェー国立美術館



ガーラル・ムンテ《一の間》1902-1904年 ノルウェー国立美術館



ガーラル・ムンテ《五の間》1902-1904年 ノルウェー国立美術館